

## 独創性と大学教育



櫛田 孝 司\*

日本人は部分的な改良は非常に得意であるが、真に独創的な仕事は極めて少ないとしばしば言われる。そしてその原因としては、和を貴び他人と違うことをすることを恐れる日本社会の性格が定説となっている。恐らくこれは的を得ているであろう。そして、むしろ余り冒険をせず、ある程度先の見えている目標に向かって勤勉に皆で力を合わせて日本的民主主義で仕事を進める所にこそ、今日の日本の成功の鍵があるように思われる。しかし、世の中は急激な速さで変化しており、政治も経済も社会も国際化が避けられない。これからは、ますます、独創性の高い自主技術が求められるであろう。これには大学も心して取り組む必要があると考えられる。

日本は科学技術を欧米から導入したが、その結果のみに目を奪われ、その精神や哲学までは十分学ばなかった。大学教育でも知識に重点が置かれ、自分で考えるということには余り力が入れられなかった。しかし、従来の常識や概念、システムをのり越えて全く新しいものを作り出そうとすれば、必ずや哲学的な思考方法が必要になり、広い視野と孤独な作業が要求される。そのような観点からの教育が大学には求められているのではないだろうか。

慶伊らの調査(大学ランキング(1994)朝日新聞社)によれば、Chemical Abstractに

\*Takashi KUSHIDA

1935年2月16日生

昭和34年東京大学工学部応用物理学科卒業

現在、大阪大学理学部長、物理学科、教授、理学博士、光物性物理学

TEL 06-850-5365

のった1991年の1年間に発表された論文数で見ると、東大、京大、阪大、東北大などはカリフォルニア大学パークレー校、スタンフォード大学、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学など欧米の大学をはるかにしのいでいる。ところが、博士課程の院生数はパークレー校、スタンフォード大学などでは4千~8千(推定)と、東大の2千人、京大の千五百人の数倍に及ぶという。院生数が多いのに米英の大学の論文数が少ないのは、博士課程といえども院生の本務は基礎的な勉強で、研究活動には少数しかタッチしていないためであろう。すなわち、この差は米英の大学では教育すなわち人材養成が大学に課せられた社会的使命であるとの認識から、教育指向が強いことにあるという。

最近の科学技術の進歩が著しいだけに、大学および大学院で学ばなければならないことは多く、知識を整理して要領よく教えても、基礎を十分にマスターさせるだけでさえ、大学4年間どころか修士課程まででも時間が足りない位であろう。日本では余りに早くから研究に参加させすぎのではないだろうか。しかしまた、4年次学生や修士課程の学生に研究的なことをやらせるのは、早くから実際に自分でやってみて経験を積ませるという意味で決して悪いことではない。どうバランスさせるか。これまでの良い所を残しつつさらに良い方向へ発展させることが重要であろう。一般社会からの御批判、御提案を得ながら、手探りしつつ大学改革を進めて行かなければならないと考えている。